

ママを
ママの
ママの



合図は彼女の部屋の扉を3回ノックをする事。

OKの時はゆっくりと扉が開く。

…兄さん…

そう応えようと、彼女は頬を赤らめて目を伏せる
最近の仕事が忙しかった事もあり、話すのは久しぶりだ。
こころなしか、いつもより瞳が潤んでいるような気がした

ギィ…

ベッドに腰をかけると、彼女の方から求めてくる。
ご無沙汰だったから寂しかったのだろうか

両手で服の下から小さな胸を愛撫する。
こぼれる吐息が熱を帯び、微かに声が洩れる。

は
—
♡

は
—
♡

は
—
♡

ん
♡

ん
ん
♡

ん
ん
♡

は
—
♡

愛撫を続けているうちに、
指先にツンと硬いものがあたって
わざと焦らして触れるたびに彼女の体が震え
口にかかる吐息も一層激しくなる

硬くなったソレをつまむと彼女は小さく喘ぐ
普段より少し上ずった可愛らしいえっちな声だ

もどかしそうによじらせる彼女の
身体のラインに沿って、わき腹から太ももへと
ゆっくり指を這わせる。

す、違っうの兄さん!!
これは……この……

内腿から奥へじつとりと指を這わせていくと、
下着が既に濡れていた。
彼女は耳まで真っ赤に染めてなにやら言い訳しているが、
その姿が逆にこちらの気持ちに火をつける



彼女の中へ指をゆっくりと挿れていく。
先ほどまで声を押し殺していた彼女も耐え切れず、声をあげる。
ぬちゅぬちゅといやらしい水音を立てながら
指はどんどん飲み込まれていく。

とても狭くて熱い。
指を動かすたびにグネグネとうごめいて、
侵入者を締め付けては押し戻そうとしてくる。

彼女の中を刺激する度に
愛液が溢れ出す。

だめっ……

のんちゃん

もうやめて……!

ビクビクと体を震わせて拒否をしているが、
彼女の本心で無いのは分かっていたし
やめるつもりなんてなかった。

グ
チュ

グ
チュ

ニョ
ニョ

ニョ
ニョ

膺の前部を指の腹で優しくノックする。
次第にグチュグチュという水音と、
可愛らしいあえぎ声が漏れ出す。
すると彼女は電気が走ったように身をのけ反らせた。

尿道口から一気に愛液が噴き出す。
布団が愛液まみれになってしまった。
彼女は布団に身体をうずめ、ビクビクと痙攣していた。

顔を真っ赤に上気させ、肩で息をする彼女は
少し怒ったような表情でこちらのズボンに手をかける。

ズボンから現れたソレに優しくキスをした後
彼女はゆっくりと舌先を這わせた。

舌をこすらせながら深く飲み込み、
こぼれる唾液を啜りながら
上目遣いでこちらを見上げる。

小さな口で必死に啜えこんでいる様子が
たまらなく愛おしい。
ああ…気持ち良い…

限界を迎えるのはあつという間だった。
彼女の口の中に勢いよく溢れ出す精液。



少し苦しそうにしながらも
全て飲み込んでいた。



ヒクヒクと可愛らしく膨らむ割れ目に
自分のモノを乱暴にあてがう。
…これだけで射精しそうなほど気持ちが良い…

そして、彼女の脚を押さえつけ、がっちり固定すると、
我慢出来ずに一気に彼女の中に入ります。
ヌルヌルとうごめく感触があまりにも気持ちよく、
早くも達しそうなになるのを必死でこらえた。

奥を突く度に上げる彼女の甘い声が興奮を掻き立てた。

おんたん♡

おんたん♡

おんたん♡

おんたん♡

おんたん♡

おんたん♡

おんたん♡

おんたん♡

おんたん♡

痛みは感じていないか、無理はないか彼女を心配するが、熱く絡みつく膣内の快感に耐え切れず腰を動かす。

彼女を持ち上げて抱き寄せる。
先ほどの姿勢よりも更に彼女の奥を突き上げる。

中がギュッと締めまり吸い上げられるような感覚。
…もう耐えられない…ッ!



体の中が一気に熱くなり、頭が真っ白になった

彼女の中に精液がドクドクと注ぎまれる

知らず知らずのうちに奥まで突いていたらしい
抜くと精液がこぼこぼと溢れてくる

それを見ながら彼女は

幸せそうに微笑んだ



っていうエッチな小説を
イベントで頒布したら

今より名前が売れて
アニメ作家への道に
近づくんじやないかなと
思ったんだけど
どうかかな！

に…兄さんは私に
こういう事したいの…？

キラッ



な、何言ってるんだよ！

俺はエロマンガ先生に
その小説の挿絵を
描いてもらおうと
見せただけで…

まよとん



ばかあああああー！！！！

に、兄さんの…

■発行■
紙切ればさみ
■執筆者■
やすゆき
■発行日■
2017/08/13
■印刷■
関西美術印刷

あとがきスペースが…

